24の講義内容　言語生活からみた新聞論評・コラム

2008.12.14～2009.12.02更新

はじめに

毎日、定期的に発行され続けている新聞にはそれぞれ新聞社の顔がある。朝日新聞であれば「天声人語」、読売新聞では「編集手帳」、毎日新聞では「余録」、産経新聞では「産後抄」、日本経済新聞社では、「春秋」というコラムがこれに相当する。そうした各社の顔を担当する編集部記者は極限られた一人の担当者がその出筆を任せられている。その個性あふれる書き手の神髄から学ぶこともこの実務表現の時間の一つなのである。

読む読まないという已前の観点については此處では触れない置こう。では、その記事内容を如何に読み解くかである。その読み解いた内容を、今度は自分の思考や感情に触れ合わせていくのである。きっと同じ共通する世界や自分には氣づかなかった世界が表出してくることであろう。

こう願って、この数例を記載してみようと思う。時過ぎれば、忘れてしまう記憶もここから再び目覚めてくる。たとえば、戦後昭和26年に他界した四十四代内閣総理大臣、幣原喜重郎というお名前はご存じだろうか？。この方のお名前に纏わるエピソードは絶えない、かつご自身がユーモリストでもあった方だ。ちょっとしたキイワードから新たな世界が構築され広がりを見せていく。そんな内容を有するのがこの新聞社の顔といえる日々の文章が教えてくれている。さらに、日々の生活のなかで息づいていく世相ことばの世界が広がっている。

師走を迎えるこの時期に新語・流行語大賞が発表され、この一年どのような歩みを運んできたのかが伺いするときでもある。落語家が活躍した年もある。一九六九(昭和四十四)年、春風亭柳昇『与太郎戦記』〔立風書房刊〕に、

国の為傷追いたれど恨はなし　優しき君の看語受ければ
君の歌しみじみ読んで気のつくは　わずかの中に誤字が二字あり

という相聞歌があった。

朝日新聞２００８年「天声人語」より
2008年12月13日（土）付

飲食業には漢字一つの店名が結構ある。きのう、都心の裏通りで「歓（ファン）」という料理店を見つけた。中国語の発音ホワンと、英語のｆｕｎ（楽しみ）をかけたようだ。字の力か、看板から陽気が立ち上っていた▼文字情報の単位として、漢字ぐらい濃密なものはない。ひと塊の直線と曲線を手がかりに、思いは色んな事物や場面へと広がっていく。固形スープのもとにも似て、一粒一粒の中に、ひとしきり語れるだけの深い味が潜む▼日本漢字能力検定協会が発表した「０８年の漢字」は「変」だった。京都・清水寺の奥の院。森清範（せいはん）貫主の大きな墨跡をテレビで拝見し、「チェンジ」を唱えた次期米大統領、毎年違うわが首相、激動の相場やガソリン価格などが浮かんでは消えた。漢字の発信力だ▼種明かしをせずに書き始めても、「亦」までピンと来る人が多かろう。今年が「恋」のはずもない。ただ、変と恋はまんざら無縁でもないらしい。共通する「亦」は、旧字では糸がもつれる様を表す。もつれて違う状況になるのが変、好きな人に心もつれて恋である（加納喜光『似て非なる漢字の辞典』東京堂出版）▼もつれ、ほぐし、希望が生まれる。変わることを恐れては、足元の情けない現実は微動だにしまい。よろず激変の年の瀬に、世直しという言葉をかみしめる▼変どころか「大変」な社会の底には、貧、困、窮、迷、恨などが折り重なり、清水寺で大書されるのを待っている。明日の世相を天に任すことなく、奥の院の舞台に「歓」の字が躍る日をみんなで引き寄

せたい。

2008年12月14日（日）付

今年九十歳になった脚本家の橋本忍さんが、週刊朝日で父親の思い出を語っている。芝居の好きな人だった。地方の町で小料理屋を営みながら、年に何度か芝居の公演をやっていた▼ところが「忠臣蔵」は意に染まなかったらしい。「一人で四十七人を斬（き）る話なら面白いけど、いい若い衆らが四十七人かかって年寄りを一人斬って何が面白いのか」と言っていた。既成の価値観にとらわれない見方に、少年だった橋本さんは感じ入ったそうだ▼その討ち入りから今日で三〇六年になる。橋本さんの父君のような人は珍しいらしく、芝居の人気は衰えない。今年で千年の「源氏物語」が国宝的物語なら、「忠臣蔵」はさしずめ国民的物語といったところだろう▼天下の敵（かたき）役は吉良上野介だが、擁護する人もいる。菊池寛は小説「吉良上野の立場」を書いた。炭小屋に隠れた吉良が「これで討たれてみい、末世まで悪人になってしまう」「わしの言い分は、敵討ちという鳴り物入りの道徳に踏みにじられる」などと悲憤するのは、理のない話ではない▼赤穂の側にも悪役はいる。仇（あだ）討ちに加わらなかった「不忠者」たちだ。大石内蔵助と対立したという大野九郎兵衛などは散々な描かれようだ。事情も言い分もあっただろうに、善玉悪玉のレッテルはいつの世も容赦がない▼〈熱燗（あつかん）や討入りおりた者同士〉。川崎展宏さんの句は、忠臣蔵を詠みながら、どこかサラリーマンの哀感に通じている。多くの日本人が折にふれてそれぞれの忠臣蔵を思う。元禄師走の出来事も、源氏に負けずに国宝的である。

〈調べること〉

今回、上記に示した後の「天声人語」（朝日新聞）の文章を用いてデータ検索を駆使して解釈してみることにする。

(1)まず手始めに、たとえば、固有名詞（人名・地名・文章作品名など）を手がかりに分析する。

①橋本忍さん…このお名前を聞いたとき、誰もがまず黒澤明さんと共に発表した映画『羅生門』（一九五〇（昭和25年）ブルーリボン賞・一九五一（昭和26年）ヴェネチア国際映画祭サン・マルコ金獅子賞（作品賞）・アカデミー賞最優秀外国語映画賞の受賞作品）の脚本を思い出すであるまいか。橋本忍さんの記念館が古郷の兵庫県市川町にあり、そのホームページを見ることができる。
http://www.town.ichikawa.hyogo.jp/culture/02_2.html
この「シナリオ作品」をみると、映画作品だけでも72本に及び、その他にテレビ、舞台などのシナリオも多数てがけているとのこと。

②千年の『源氏物語』…
http://publications.asahi.com/ecs/detail/?item_id=9804

③『忠臣蔵』…
http://www.tv-asahi.co.jp/chushingura/
忠臣蔵PV　http://jp.youtube.com/watch?v=MydTQbTJjX0

④菊池寛『吉良上野の立場』…青空文庫に所載
http://www.aozora.gr.jp/cards/000083/files/487_19887.html
http://novel.atpedia.jp/page/1486.html

長安義信画「義士肖像」（赤穂・花岳寺所蔵）

（2）次に用語を確認する。このとき、このことばはどのような時代に生まれどのように用いられてきたのか、実際の作品や国語辞書、漢和辞書、語源辞典などをもとに確認してみよう。

「国宝的物語」と「国民的物語」

「**不忠者**」…小学館『日本国語大辞典』第二版に、

ふちゅう-もの【不忠者】〔名〕忠義でない者。不忠である者。＊浄瑠璃・信州川中島合戦〔一七二一〕一「母孝行迚身をかばへば、祿盗人の不忠者」＊文明論之概略〔一八七五〕〈福沢諭吉〉一・二「北条、足利の如き不忠者にても」

とある。〈学習〉この読みを「フチュウシャ」となぜ読まないのか？類似の表現に「**けっしょ-もの【闕所者】**〔名〕江戸時代、闕所の刑に処せられた者。＊俳諧・桃青三百韻附両吟二百韻〔一六七八〕「公儀のおふれ武蔵野の秋〈信章〉闕所ものはらふ草より草の露〈信徳〉」＊公裁秘録-一（古事類苑・法律四一）「欠所心得之事〈略〉但都而私領之もの欠所者、其領主地頭え欠所之達書遣、領主地頭え取上来候」」がある。

（3）内容として時事を意識しているはずなのだから、その根幹にある過去の時事と現在の時事のどのような事象をここに結びつけて書き出されているのかを考えてみよう。

「忠臣蔵」に「サラリーマンの哀感」

（4）この文章に、どのようなイラストをあなただったら貼りますか？ご自身で描くのも良し、また、此に見合うイラスト絵画を創作して甦生するのもよいでしょう。是非、取り組んでみては如何でしょうか……。図絵は、江戸末期から明治時代にかけて刷られた錦絵を参考に掲載した。

〈学習補講〉「**不忠者**」

時代小説に、藤井 邦夫（著）『不忠者―結城半蔵事件始末』〔学研M文庫〕とあって、その要旨に「今は亡き妻の墓参の帰り道、南町奉行所与力の結城半蔵は、若侍たちと斬り合っている初老の武士を助けた。だがその武士は、拙者は不忠者…という言葉を残して絶命した…。「我らは生かして捕らえるのが役目。だが、手に余る者には容赦はいらぬ」と言い放ち、一命を賭して凶賊に挑む八丁堀与力の士魂の一刀が、江戸の闇を斬り裂く！」と用いている。昔、武家社会の侍にとっては、このような人物を「犬侍」と罵ったようだ。主君に仕える家臣は、忠義を全うできなければ「不忠の臣」と蔑まれる。「不忠の臣」と同じように「不忠の者」という表現も考えておかねば成るまい。

神風特別攻撃隊常盤忠華隊として昭和20年4月12日南西諸島にて戦死した海軍少佐中西達二の「最後の手紙」の文中に、「不忠の臣達二は今ここにやうやく忠義の大道に取付かうとしています。しかしまだ忠の道は深遠です。不忠の臣達二が不忠の臣で終るのは当然であり、私は満足であります」と三度も用いているのです。この文言を現代の私たちはどう理解するのでしょうか。

http://www.warbirds.jp/senri/08tubasa/15hyakuri/naka.html

『**報徳記**』巻之六・【9】草野正辰先生の良法を聞き国民を安撫せんとす」に、「国の中興を拒がば、仮令積年の忠勤ありとも今は之を不忠の臣といふべし。不忠の者を退け、賢を用ゐざれば何を以て六十年余の衰国を挙ぐることを得ん」とあって、「不忠の臣」と同じくして「不忠の者」という表現が用いられている。

『**続日本紀**』巻廿・天平宝字元年（七五七）七月戊午〈十二〉に、「勅曰。右大臣豐成者。事君不忠。爲臣不義。私附賊黨。潛忌内相。知搆大乱。無敢奏上。及事發覺。亦不肯究。若怠延日。殆滅天宗。嗚乎宰輔之任。豈合如此。宜停右大臣任。左降大宰員外帥」※「君に事へて忠ならず、臣として義しからず」〔新大系本三213頁〕と訓読する。

『**先代旧事本紀**』巻第三・天神本紀「高皇産靈尊賜天稚彦於天之鹿兒弓、天之羽々矢而遣之。此神亦不忠誠矣。」巻九・帝皇本紀に「春三月甲子朔の日、定めて「君后の為に不忠を言う者、亦母の為に不孝を称える者は、もし声を上げずこれを隠すは同じくその罪を担い重く刑法を科す」と言われました。

いよいよ、創作活動開始

どんな筋立てになるのやら……。でも、古くてあらたかな言葉表現である「不忠者」をどう展開するかを考え抜くのです。考え抜いたときにそこに立派な表現が見えて来ます。

玲瓏の知性と熱烈な感情を持ってすれば、自ずと道は開けよう！